少数民族と自然保護

土橋信男

この五月から十月まで日本の少数民族であり原住民であるアイヌとの交流のために北海道に滞在をしていたオーストラリアの原住民であるアボリジニーのテリー・ウイダーズ氏をはからずもお世話することになり、氏との接触の中から、逆にオーストラリアの少数民族の生活や文化について学ぶ機会を与えられた。また、この夏に訪米した際にほんのわずかだが、アメリカ北西海岸のインディアンについて直接に学ぶ機会を得ることもできた。

この二つの経験を通して感じたことは、これら各地における先住民族の文化がなんと北海道のアイヌの文化に共通する点があるかということである。アボリジニーも、北米北西海岸のインディアンも、そしてアイヌも狩猟民族であった。したがってそこに共通している考え方は、いかに自然とともに、自然との調和の中に生きてきたかということである。いいかえるならば、いかに自然の中に与えられた資源を大切にしてきたかということである。

約四年前に、ある会合で札幌在住のアイヌのO氏と出会い親しく交わりを得るようになって以来、アイヌのものの考え方について随分教えられてきた。そうしたアイヌの価値観について学生にも学んでほしいと思い、O氏にお願いして再三大学においでいただき話をしていただいてきた。そのような中から教えられたわれわれが学ぶべきだと思うアイヌの自然観を二、三ご紹介したい。

アイヌは狩猟や採取の時に決して乱獲はしなかったそうである。たとえば、アイヌがもっとも好きなプクサもしくはキトピロ（いわゆるギョージャニンニク）をとるときにも、たくさん生えているからといって必要以上にとることはしなかったというのである。鹿などの動物についても同じである。

また、織物に使う木の皮をはぐ時にも木を枯らさぬような配慮をして、その南側の一部のみをはいだとのことである。したがって山林の保護については最大の努力を払ったので、この北海道がアイヌモシリ（アイヌの本土）であった時代には、失火による山火事はおこしたことがなかったそうである。

川はもっとも大切な水資源であるため、川を汚さないように最大の注意が払われたようである。そして、それは小さい子供の時から徹底して教え、身につけさせたとのことである。川の幸である魚、とくに鮭はアイヌにとってもっとも重要な食糧となっていたが、その鮭をとるのについても産卵のために上る鮭についてはごく一部しかとらず、保存用にたくさんとるのは産卵後のホッチャレであり、それはホッチャレならば脂気がなく、干物として保存が可能だからだとのことである。

こうしたアイヌの考え方の根底には神から与えられた自然の恵みを大切にして、しかも人間だけでなく、他の動物たちとも共存して生きるという世界観があったのである。

こうした先住民族の文化に対して、それを劣等視しつづけ、消えゆく運命にあるものとして、いや、むしろ滅亡の方向へと追いこんできたのが、北海道へ移住してきた大和民族の姿勢であったことは深く反省されねばならないだろう。

去る九月に九年ぶりに札幌で開催された日本人類学会、民族学会連合大会はそうした反省の方向が如実に表われたといってよいであろう。一九七二年の大会では、アイヌを研究対象としてみていたという研究題目の故に多くのラディカルなアイヌに会場で批判され、かつてない混乱が生じたとのことであるが、今回は主題講演者にアイヌの文化人萱野茂氏を招き、「アイヌ民族の自然観について」という講演に学ぼうという姿勢があったからである。萱野氏は公開講演会場にほぼ一杯になった聴衆を前にアイヌは自然と対話をして生きてきたこと、また、アイヌは神との間の相互信頼があったので、山野の恵みについて不安なく生きてきたことをしみじみと語られた。

十月のはじめに有志のグループにより、二風谷を訪れ萱野氏に再度お話していただく機会を得たが、「自然保護はアイヌにお任せ下さい」ということばにはまったく肯首せざるを得ないと思った。

先住民族の文化は決して滅亡させてはならないし、また博物館で保存すべきものでもない。現在と未来の社会のために大いに学び、存続させねばならないであろう。さらに北海道の自然保護については先住民族の知恵に学ぶだけでなくて、大いにその協

力を得る必要があるのではなかろうか。

（北星学園大学教授）

会誌第二〇号を読んで

井手貞夫

会誌第二〇号を読んで、一、二気づいたことを書かせてもらう。

㈠、「会誌第二〇号を迎えて」という座談会の中で、石川前会長の言葉に「それ以前はまあ、サロン風でしたね。……ちゃんとした出版物はなかったですね」という言葉がある。「サロン風でしたね」という言葉はおそらく現在の北海道自然保護協会の前の形、昭和三十四年に発足して林　常夫さんが会長、当時の植物園長・館脇　操さんが主として運営にあたっていた時代、及び昭和三十七年に再改組して日本自然保護協会札幌支部となって今井道雄さんが支部長、小関、石川、井手が幹事をしていた時代に最もよくあてはまる。

昭和三十九年夏から今井道雄さんの諒解のもとに私がすっかり準備をして、今井さんの口ぞえで東条猛猪さんが会長、私が理事長をしていた時代は、赤岳から白雲を経て裾合平に至る自動車道路の阻止、豊平峡ダムの建設にあたって、現在の溪谷ぞいの道路を工事用に拡張しようとするのに反対して、溪谷ぞいの道路は遊歩道として残すこと、工事用には別に道路を作ることを条件として、これを開発局に承認させたこと札幌オリンピックの際に恵庭岳の滑降コース建設に反対して、結局、これをオリンピック後に撤回させることを日本オリンピック委員会に約束させたこと、また大雪縦貫道路建設に反対して、多くの人との協力のもとにこれを阻止したこと、南北海道自然保護協会、釧路自然保護協会の設立への働きかけ、その他、非常に多くの活発な活動をしている。そのほか、その後の協会が手がけた問題の殆んどすべてが既に問題とされていた。そのことは会誌の七、八号までにほとんどすべて記録されていることであるが、このことは以前の協会の活動が単なるサロン風のものでなかったことを最も雄弁に語ると共に、自然保護の問題というのは常に古くて新しい困難なことだということをまた語るものであろう。

なお、その言葉のあとに続く辻井君の「この当時は、とくに編集会議を固くやって」いなかったという言葉はその通りであるが、しかし私は新しい協会の発足と同時に、立派な会誌を作って、会員が喜んで保存できるようなものにしたい、と強く願っていた。幸い斎藤春雄氏の口ぞえで山口透氏や谷口氏その他の尽力を得て却々立派な形態ができたが、しかし内容についても編集会議という形式こそとらなかったが、私は石川氏や辻井君などと相談をしてプランをたてて、それぞれの人に執筆依頼をしていた。グラビヤだけは辻井君と相談のうえ、やや思いつきでまとめることはあったが決して「集まった原稿の顔をみてから、山口さんにポンと預けて」という言葉から連想されるような無雑作なことではなかった。私が当初からこの会誌にどれほど力を置いていたかは、私が理事長をしていた時代の会誌にはすべて英文の目次をつけていたことがその一つの証左である。私はごく簡単にでも英文のレジメをつけたかったのであるが、それが大変困難であり、時間と費用とがかかるのでやむなく目次を英文にすることしかできなかったが、そうした私の気持ちがスイスとドイツの自然保護協会の有力な人々との今日なお続いている親交のもととなったと思う。

㈡、吉田勇治氏の文章の終（四四頁）に「自然保護を口にする人が道路には反対、ダムは賛成という神経は理解できない」とある。私はかつて新聞の投書欄に、道路には反対だが、飲料水用のダムは必要やむを得なければ仕方のないことだ、という意味のことを書いたことがある。さきにもふれた豊平峡ダムにも当初私は反対であった。市の当局者と種々折衝した結果、札幌市民の飲料水の確保のためには他にそれにかわる方法のないことを知って、やむなく前述のような条件で妥協したのである。水の問題は今後、非常に多くの困難な問題を提出してくるであろう。人間が生きていく限り原始的自然は次第に浸蝕されざるを得なくなる。それをどこまでどの程度に自然を残し、自然との調和を保つか、それが問題なのである。

ルソーが最も愛した中部フランスの自然はすでに美しい田園風景であった。それは決して原始の自然ではなかったのである。しかもルソーの考えた原始的自然とは、ルソーが心に理想として描いていた理念的自然であって、決して現実の原始的自然ではなかったのである。そして、ルソーが心に描いた理想的な自然、それは現実の自然とは異る完全に理念的な理想的なもので、そこからその社会改革論もエミールの理想教育論も生まれて来たのであるが、そうした理想的な完全な自然というのは、彼が生活していた中部フランスから中部ドイツへかけてのヨーロッパの、じつに嵐一つない自然、恩恵を人間に与えるだけの自然の中から生まれた思想であることを忘れてはなら

ない。もちろんスイスでも春の雪どけによる洪水や冬のなだれの被害はあったにしても概して中部フランスからドイツへかけての自然はじつに人間にとって恵まれた自然で日本のような台風や大雨による被害の年中行事の自然とは大変な違いである。

話が横にいささかそれたが、要するに人間はその周囲の自然を利用して、その自然環境をできるだけ有利に利用し、作りかえながら今日まで発展して来たのである。ただその利用がすぎて、人間をとりまく大自然そのものがさまざまな反作用を精神的にも肉体的にも与えるときに至って、初めて私達は自然保護ということの、それは今日環境保全という方がより適切であるが、その重要性に気づいたのである。従って自然を破壊するような大工事は、いっさいしないに越したことはない。しかし人口が増し社会が発展するにつれて、原始的自然が浸蝕されることはやむを得ない。すでに人口が増加し、河川や地下水の利用がふえ、水不足ということになれば、海水から大量の真水が容易に得られるようにでもならない限りこれは何とかして水の給供を考えなくてはならないことになる。だからといって勿論安易に何でもダムを作ればよい、というものではない。場合によっては都市人口の分散、使用水の還元、その他あらゆる方法を講じなくてはならない場合も起り得る。そして、どうしてもやむを得なければダムを考えざるを得ないということにもなろう。それは今日の石油エネルギーと全く同様に困難な問題となってくるだろう。すでに浦河・大樹間の道路も着手し、日勝峠を越える道路があり、新しい鉄道の開通もある時に、なぜ日高縦貫道路を早急に通さねばならないか、という問題とは、次元の違うことである。

自然保護運動が、自然に手をつけることには何でも反対する、という印象を一般に与えることは好ましいことではない。為政者もまた一方的に結論を出さずに、もっと自然保護団体と当初から問題を話しあうという姿勢が欲しいものである。

㈢、一原有徳さんが日高の道路ができると山へ行くのに便利になってよい、というのは分かる。山行が便利になることは私達年よりには大変嬉しいことだが、反面、山が荒れ、生態系、殊に動物生態系に大きな影響を与えることはまことに困る。一原さんはその主張を日本山岳会会報にも随分激しい言葉で、しかも思いちがいをしながら書いて、それについては山岳会々報にはそれに対する穏かな反論も訂正もなされているが、要するに一原さんのいいたいことは貴重な森林が次々と伐採されて行くのに、その時には黙っていて、道路が通るというと急に今ごろ反対するのは何事か、便利になる道路に反対するくらいなら、これまで着々と進んで来た日高の重要な自然の破壊に対してなぜもっと早く手を打たなかったのか、ということにある、と思う。それももっともである。

しかし、それならなぜ一原さんはそのことを早く人々に訴えなかったのか、と私はいいたい。一原さんの周囲には、一原さんを尊敬する山仲間が何人もいるのである。そしてその人達の中には、多くの私の友人もいる。一原さん自身だって私を知らないわけではない。なぜそういう大切なことをいって下さらなかったのか。そんなことくらい知らないで自然保護運動に携わるのが間違いだ、といわれれば甚だ赤面の至りであるが、事実、私は一原さんほどに北海道の山を歩いてはいない。私はむしろ自分の仕事に忙しく追われている人間である。そして動植物の専門家でもない。そういうことを知っている人達が事態の重大さを知りながら、それについて一言も声を上げないとしたら、少なくともそれを大切に思う心があったら、自分では反対しないまでも、せめてしかるべき人に事の重大さを伝える労位は惜しまないで欲しい。森林伐採問題は林野庁の独立採算制が悪の一つの根元である。これを何とか改められないものかといろいろ努力したが、財政の大きな壁をつき破ることの困難さを嘆くばかりというのが実情である。ともかく便利になった道は大いにご利用になるがよろしい、またそのことを喜ぶ心は私とて全く同様である。ただより貴重なものを失なうことへの考慮を私達は忘れてはならない。

現在の北海道自然保護協会が生まれたきっかけは、大雪山にいろいろとロープウェーの計画が聞え出したことであった。早く活動的な協会を作って対応策を考えないといけない、と思って私は駈けずりまわったのであるが、その間に黒岳とユコマンベツのロープウェーが認可になった。そこで今度はロープウェーの発着所の公園計画を積極的に作った。

現在のユコマンベツ及黒岳のロープウェー終着駅の公園計画はそれによったものである。おそらく自然保護協会の発足がロープウェーの認可の前だったら、私達はロープウェーに反対したろうと思う。しかし、でき上ったロープウェーについては、あれができて困る、という声よりも圧倒的にあのおかげで足の弱い者も老人も、今まであした大観に接することのできなかった人々が見ることができるようになった、という声の方が大きい。定山渓の奥の国際スキ

ー場の建設にも随分反対があったが、でき上ってみると札幌周辺では最もよいスキー場となって、斜陽をかこっていた定山渓が息を吹きかえしたということは結構なことである。

しかし、大雪の場合でも、結果がよかったという声が圧倒的ではあるが、そして大雪の縦走がらくになったことは嬉しいが、そのために大雪山が以前から見ればはるかに荒れてきたことも事実である。開発が進めば進むほど便利にはなるが、自然が荒れることは事実である。知床横断道路も論外でない。人口が増え、人々がより豊かな生活を目ざす限り、こうした開発はいよいよ進むに違いない。その場合、どこが最終の限界であるかを決めることは定式的には非常に困難である。それはその時代とその時代における問題認識の深さとそれがどれだけ与論を動かすかによって決まる、定式的に、これ以上開発が進めば人類が死滅に向ってより一歩近づくという結果がかりに出たとしても、もしその時の開発を必要とする声がより強ければその最後の線をも突破するであろう。たとえこれ以上食べれば体に有害であると分かっていても、人間というものはうまいものには手を出すものである。

（北星学園大教授）

藻岩の四季と私

福地郁子

藻岩山スキー場の下に住むようになって四季の変化を毎年毎年楽しみ、今年もあと少しで雪の時期になりましたが、春夏秋冬それぞれみな大好きです。

主婦といっても、野鳥、野草、昆虫などに興味を持ち出すと、外が気になってゆっくり家の中にいる暇がありません。野鳥の観察は一年を通じてですが、おもしろいのは冬にわが家のナシの木にあるバードテーブルにくるものと、その周りに集まるものが興味を引かれます。吹雪の時などは大モテで、私もエサを集めるのに四苦八苦です。ちなみにパン屋さんでパンの耳、肉屋さんで脂身、ヒマワリの種は畑のまわりに植えて収穫し、ごはんつぶは夏からほして乾し飯にしてと、忙しいのです。家族だけでも七人と、コリー犬一匹、リス三匹、カナヘビなど小動物なのに何を好きこのんでと友達に笑われますが、あの愛らしい動作が見られると思うとわずらわしいことが忘れられます。

シジュウカラ、ハシブトガラ、ゴジュウカラ、ヤマガラ、アカゲラ、シメ、カケス、ヒヨドリ、ツグミなどが常連で、時にはミヤマホオジロ、ハイタカ、アカハラなど珍しい鳥も見られます。ハシブトガラなどはバードテーブルにエサを入れに行くと隣りにある脂身の下げてあるところから逃げる気配がありません。エサを入れたステンレスのボールをカンカンとたたくと、どこからともなくカラの類が周りに集まります。家族の中で一番、観察時間の長い私の役得で、アカゲラがカケスを威嚇する時に、白黒のダンダラ模様の羽をすっかり拡げて、コウモリ傘のようにするのを見てビックリしてしまいました。おそらくあんまり他の人は見たことがないのではと、一人得意になっています。

また、バードテーブルを目がけて、シジュウカラとヒヨドリが空中で鉢合わせということも何度か見られました。だんだん耳の方も慣れてきて、マキノセンニュウ、アオジ、コルリ、オオルリと解かるようになって、ますます楽しみがふえます。

夏は小学三年生の息子とともにというと聞えは良いのですが、私の方が夢中で、藻岩山で採取できる蝶に挑戦。四月の末から蝶を追っています。藻岩山だけで大変な種類の蝶がいるものだなー、と感心しています。オオムラサキの力強い羽音は鳥と間違うほどで、それに反してシロチョウ類のはかないような、ものういような、舞い方にも興味をひかれました。

今年の目標は、成虫で越冬したものから秋までに羽化するまでのタテハチョウを追うことにしました。そして、ルリタテハ、キベリタテハ、Lタテハ、Cタテハ、ヒメアカタテハ、ヒオドシチョウ、コヒオドシなどを採取することができました。残念なのは、オオイチモンジをのがしてしまったことです。楽しみは来年に残しておきましょう。息子と二人での秘密の穴場を持って胸をワクワクさせています。

春の山菜（アズキナ、ニリンソウ、ウド、ワラビ）、秋の果実酒作り（山ぶどう、スモモ、姫リンゴカリンズ、マタタビ）、たっぷりのれるスキー。このように藻岩山のふところに抱れて自然にタップリつかって生活のできることに感謝をしていましたところ、八木先生のお誘いでこの会に入ることができました。

先生はきっと、自然と仲良く遊ぶだけでなく、一歩進めて自然を知る勉強の機会を与えてくださったのだと考え、改めて周りの自然に目をむけたいと思っています。

（札幌市・主婦）